

「馬琴読本の様式的把握に関する研究」要約

第一章「馬琴読本の趣向—変容と越境—」

第一節「「身替り」の機能—〈巷談もの〉を中心に—」

本節では、抒情性を裏付ける演劇的趣向の一つである「身替り」について、〈巷談もの〉を中心に、その利用方法を明らかにした。馬琴は当初、神仏の靈験によって危機的状況を回避する目的で「身替り」を利用していたが、『墨田川梅柳新書』以降、「身替り」で葛藤する心理、すなわち「人情」を描写しようと試みる。そして〈巷談もの〉に至ると、「横死の回避」「罪障消滅」といった勧善懲悪に則した方法を採用ようになった。

第二節「証拠の品と離別・邂逅—文化期を中心に—」

本節では、証拠の品を介した離別・邂逅を描いた作品を分析し、その位相を考察した。馬琴は当初、証拠の品を離別・邂逅の場面に生かすことができずにいたが、『四天王剽盗異録』によってはじめて、それが可能となった。また、『勧善常世物語』『墨田川梅柳新書』では、証拠の品が邂逅時の「割符」として描かれることで、男女の情縁・奇縁が強調されるようになった。そして、『敵討雑居寝物語』『苺萱後伝玉櫛笥』の登場を機に、本趣向が物語の枠組として機能するようになる。この方法は『括頭巾縮緬紙衣』以降の〈巷談もの〉に多く見られ、とりわけ『糸桜春蝶奇縁』においては、男女の情縁・奇縁を証拠の品による「名詮自性」（名前が人や物の特質をあらわすこと）で説明している。

第三節「読本・合巻における趣向の往還—「血合わせ」を手がかりに—」

本節では、同種の趣向が読本・合巻を問わず利用され、相互交換が可能だということを、「血合わせ」を手がかりとして明らかにした。馬琴は、親子の血の融合による「血合わせ」に、善悪を明断し、正統な血筋か否かを判別する機能が備わることを、『棠大門屋敷』から見出し、読本・合巻で度々利用する。一方で、親の髑髏に子の血を注ぐ「血合わせ」を忌避してきたのは、演劇種という問題以上に、如上の機能を見出せなかったことが大きな要因だった。しかし、中国の歴史書に趣向源を求めることにより、この問題は解消され、『南総里見八犬伝』で典拠を明示するに至る。その後『近世説美少年録』『新編金瓶梅』では、血縁による悪性の継承を具体化する方法として利用されている。

第二章「馬琴読本の人物造型—勧善懲悪・因果応報を軸として—」

第一節「復仇する忠臣—予讓の故事を手がかりに—」

本節では、忠臣・義士として名高い予讓をモチーフとする人物造型について考察した。馬琴は当初、仇討の完遂を以て結末とする作品に予讓の故事を利用していたが、原話の悲哀性が損なわれたためか、『松染情史秋七草』『常夏草紙』では、未遂に終わらせることで悲哀性を強調する。また、『頼豪阿闍梨怪鼠伝』『占夢南柯後記』では、予讓像が賦与された人物の善悪を変貌させることで、仇討の虚しさを強調するとともに、その意義を失わし

めることにも成功する。このような行為は「仇敵の誤認」「手段の誤用」の二点に集約でき、この要素を用いて『南総里見八犬伝』の犬山道節を造型した。

第二節「悪女の造型—怨霊憑依と転生—」

本節では、悪女が如何にして造型されたのかについて、勸善懲惡とりわけ因果応報に基づき、「怨霊憑依」「転生」の両面から考察した。親から子、子から孫へと継承される悪性の連鎖のなかで、悪女は生み出され、善人に仇なす行為を働くのだが、血縁で説明できない場合においては、「怨霊憑依」「転生」を用いた。「怨霊憑依」は、当人の悪性が生来のものではなく、怨霊が憑依することによってもたらされるというもの。怨霊の発現は周辺人物の行為に起因することが多く、因果の理に適っている。一方「転生」は、前世と現世の出来事に厳密な対応関係を持たせることを目的としたもの。悪女化の要因である前世の悪業が、当人に直接影響を及ぼしているのが特徴である。

第三節「〈巷談もの〉における主人公像の変容」

本節では、〈巷談もの〉に登場する主人公像を分析し、その変容を明らかにした。『括頭巾縮緬紙衣』でヒロインを横死させたことを後悔した馬琴は、『三七全伝南柯夢』『旬殿実実記』では別人による「身替り」とすることでそれを回避させた。また、『松染情史秋七草』『常夏草紙』『占夢南柯後記』では、武士階級に属する貴顕の子女を創出し、彼らが受け継いだ正統な血筋を守るため、町人階級に属する情話の男女を「身替り」とするほか、「血合わせ」を用いて出自の改変を行ってもある。そして『糸桜春蝶奇縁』『美濃旧衣八丈綺談』になると、情話の男女が犯す不道徳を明らかにし、物語中での是正を試みる。